

東日本支部だより

2025 年 3 月 5 日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

今後の例会予定

第 144 回 定例研究会

2025 年 3 月 8 日(土)

大正大学2号館6階人文学科閲覧室および
Zoomによるハイブリッド開催

卒論・修論発表

(詳細は下記■定例研究会のお知らせ■を参照)

第 145 回 定例研究会

2025 年 4 月 12 日(土)

東京大学駒場キャンパス18号館コラボレー
ションルーム4および Zoom によるハイブリ
ッド開催

卒論・修論発表

(詳細は下記■定例研究会のお知らせ■を参照)

第 146 回 定例研究会

2025 年 6 月 7 日(土)

武蔵野音楽大学開催(予定)
未定(博士論文発表ほか)

■定例研究会のお知らせ■

◆東日本支部 第 144 回定例研究会

日時: 2025 年 3 月 8 日(土) 13:00~16:30

開催方式: 大正大学2号館6階人文学科閲覧室と、オンライ
ン会議システムの Zoom を使用して例会を開催

※初めて Zoom 例会に参加される方へ:参加には Web カメ
ラとマイクのついた PC、またはタブレット、スマートフォンな
どが必要となります。

参加方法: 事前申込制。下記 URL あるいは QR コードより申
し込みフォームへアクセスし、事前に参加をお申し込みくだ
さい。<http://tog.a.la9.jp/higashi/index.html>

申込締切: 3 月 5 日(水)

ミーティングコード等は 3 月 7 日
(金)にお送りいたします。

※なお、本例会は当日に発表、質
疑応答ともにおこないます。



○卒業論文発表 (その 1)

1. 明治 10 年代から 20 年代の五線譜受容に関する考察
—近代日本における「読む」行為の一諸相として—
福西 佳乃子(お茶の水女子大学)
2. 林広守撰《君が代》の編曲について
—和声進行の分析を中心に—
三浦 青葉(東京藝術大学)

3. 日本のキリスト教系幼稚園で歌われる聖歌・讃美歌の
現在—春日荘聖マリア幼稚園の例を中心に—

大森 悠(東京藝術大学)

4. 戦前の旧制中学校における音楽教育
—上田中学校『校友会雑誌』の分析を中心に—

小山 千秋(東京藝術大学)

○修士論文発表 (その1)

5. GHQ占領下のラジオ音楽番組にみるイデオロギーと
社会教育的側面

山谷 咲月(お茶の水女子大学大学院)

6. 中華民国留学生程懋筠の音楽教育思想・実践再考

周 子宜(東京藝術大学大学院)

7. 『仁智要録』における箏曲(廻杯楽)の楽譜解釈の研究

李 文心(東京音楽大学大学院)

8. 清代古譜『絃索備考』における箏譜(琴音板)の研究

李 姝涵(東京音楽大学大学院)

司会 伏木 香織 (大正大学)

◆東日本支部 第145回定例研究会

日時: 2025年4月12日(土) 13:00~16:40

開催方式: 東京大学駒場キャンパス18号館コラボレーション
ルーム4と、オンライン会議システムのZoomを使用して開催

※初めてZoom例会に参加される方へ:参加にはWebカメラとマイクのついたPC、またはタブレット、スマートフォン
などが必要となります。

参加方法:事前申込制。下記URL あるいはQRコードより申し
込みフォームへアクセスし、事前に参加をお申し込みくだ

さい。<http://tog.a.la9.jp/higashi/index.html>

申込締切: 4月9日(水)

ミーティングコード等は4月11日

(金)にお送りいたします。

※なお、本例会は当日に発表、質
疑応答ともにおこないます。



○卒業論文発表 (その2)

1. 江戸のお狂言師

—その実態と社会的評価を考察する—

大野 晶子(京都芸術大学)

2. 三匹獅子舞伝承におけるアウトサイダーの貢献可能性

—「長野ささら獅子舞」への参与観察を中心に—

當山 凌子(東京藝術大学)

3. アルゼンチン・タンゴ音楽の歴史における楽曲アレン

ジと演奏スタイルの関わり —楽団個性化のプロセス—

鈴木 崇朗(東京藝術大学)

○修士論文発表 (その2)

4. 河竹黙阿弥作品における音楽演出と伝承の関連性

—『鼠小紋東君新形』の分析を中心に—

吉田 梨乃(お茶の水女子大学大学院)

5. 多忠朝が提唱した「神社音楽」の戦後

—神社本庁による雅楽系の演目の導入に着目して—

牧野 友香(東京藝術大学大学院)

6. 1920年代における諸井三郎と「スレヤ」の結成

東館 祐真(東京藝術大学大学院)

7. 高知「よさこい祭り」における演舞曲の多様化について
—1980年代以降の創作プロセスと音楽的特徴に注目して—

壽美 玲子(国立音楽大学大学院)

8. 明代琴歌譜思想研究

—楊表正『重修正文對音捷要真傳琴譜大全』を中心に—

余 静嘉(東京大学大学院)

司会 越懸澤 麻衣(宮城学院女子大学)

■定例研究会の報告■

◆東日本支部 第142回定例研究会

日時: 2024年12月7日(土) 14:00~16:00

開催方式: Zoomによるオンライン開催

司会: 福田千絵(お茶ノ水女子大学ほか非常勤講師)

1. 長唄の伝承に用いられる記譜の特徴

—明治末期から大正初期に刊行された2種類の楽譜の比較を通して—

衣笠 詠子(東京藝術大学大学院博士後期課程)

(発表要旨)

本研究の目的は、吉住小十郎こと山田舜平(1886-1923)による『長唄新稽古本』(以下、「小十郎譜」)が長唄の伝習時に現在も広く使用されている特徴と要因を明らかにすることである。

方法として、明治期から大正期にかけて別の記譜法に基づき刊行された北村季晴(1872-1931)による長唄伝習用楽譜『長唄楽譜』と比較した。本研究では、両者が明治期における邦楽曲の五線譜化事業に採譜者として従事していたことに着目し、それぞれの刊行物から歌舞伎劇長唄《勧進帳》を例に挙げ、記譜法と記譜情報についての比較分析を行った。

対象の『長唄楽譜』は1901(明治34)年に出版、『小十郎譜』は1917(大正6)年に出版されていることから時差はあるものの、諸言から長唄の伝統曲を、本来の歌と三味線で演奏するという同じ目的で出版された。『長唄楽譜』は十三世杵屋六左衛門、『小十郎譜』は杵屋六四郎と吉住小三郎の演奏を採譜している。どちらもより正確な楽曲の伝承を目指したと考えられるが、記譜法や記譜情報には多くの違いがみられた。

北村の『長唄楽譜』は、西洋音楽の理論や形式にあてはめた「西洋楽譜」であり、「六左衛門の実寫」として演奏を正

確に書き表しており、楽曲そのものの伝承方法に楽譜中心に据えたともいえる。

一方『小十郎譜』は、相対音高を算用数字を用いて記譜し、旋律についてはおおよその情報に留めている。師匠や専門家から、型や間について「活きた説明」を習うことを推奨しており、演奏時の正確さの他「情味」を重視していることから、口伝による伝承を前提とし、その過程において補足的に楽譜を使用することが意図されている。

比較により、『小十郎譜』が長唄において口頭伝承という文化のありようそのものを表していることが特徴であり、それが演奏者、教わる側、教える側に広く楽譜が使用されている要因と結論付けた。

本研究では初版時の情報に留まったが、今後の課題として「小十郎譜」の出版状況や重版に際しての記譜情報の変遷を調査したいと考える。

(傍聴記:配川美加)

現在、長唄で一般に普及している譜本『長唄新稽古本』と『三味線文化譜』は、どちらも明治期の五線譜による採譜が出発点と考えられる。そのうち、『長唄新稽古本』を取り上げて、長唄《勧進帳》について、北村季晴の五線譜『長唄楽譜』と比較し、『長唄新稽古本』が普及した要因を探るという内容はとても興味深い。『長唄新稽古本』は度々改訂され、発表者が使用した譜は後の版と思われるが、発表者が指摘したように、①縦書きの歌詞に漢字を併記し、②「中落し」のような旋律型(大薩摩四十八手)や③口三味線を記載するなどの特徴は初版から変わらない。このうち、①は江戸期以来使用されてきた詞章本と共通し、②のような型も特に古い詞章本には多く記載されている。③の口三味線も古くから教習に使われてきた。そうした特徴は、普及の要因となったと考えて良いだろう。なお、北村が規範とした演奏者の六左衛門は、その当時だと13世になる。12世とした理由をぜひ知りたい。

2. 曹洞宗僧侶、来馬琢道の仏教音楽活動について

—正則音楽講習所を中心に—

山内弾正(曹洞宗総合研究センター宗学研究部門研究員)

(発表要旨)

明治初頭の仏教界では西洋音楽を用いた教化活動が展開され、仏教と音楽を結びつける「仏教音楽」活動が本格化した。特に明治22年に発足した「仏教唱歌会」はその嚆矢とも言うべき活動を展開し、初の仏教唱歌の歌集として『仏教唱歌集第一』を刊行した。発足には浄土宗僧侶の岩井智海(1863～1942)の他に、『音楽雑誌』を創始した四釜訥治(1854～1928)らが関わった。所属会員は数百名におよび、名誉会員として各宗派の代表者や政府要人が名前を連ねていた一方で、活動期間は限定的であったと見られる。この期間に岩井は『仏教音楽論』などを刊行したが、その後は目立った音楽活動を展開するに至らなかった。

従来の仏教音楽研究で見過ごされている人物に曹洞宗僧侶の来馬琢道(1877～1964)がいる。来馬はその生涯で一貫して布教教化に積極的な姿勢を見せ、出版事業に携わる中で多くの著作を残した。曹洞宗学にも通じ、『禅門宝鑑』や『曹洞宗全書』の刊行など、現在の曹洞宗儀礼に大きな影響を及ぼしている。また、浅草区議会議員などを経て、第一回参議院議員選挙に当選した。近年の研究では、仏前結婚式を進めた人物として紹介されることが多い。

本発表では、来馬の開設した「正則音楽講習所」に焦点をあてる。岩井の音楽活動が限定的であったと見られる一方で、来馬による活動は明治35年頃に始まり、その後も音楽教化に取り組む姿勢は一貫して高い。中でも明治37年に浅草萬隆寺の境内に開かれた「正則音楽講習所」は、日本で初めて寺院で運営された音楽教習所であったと思われる。「正則音楽講習所」は明治42年時点で浅草区唯一の洋楽教授所として数えられており、活動期間は少なくとも大正6年の頃まで下ると思われる。本発表では、来馬

の仏教音楽活動を紐解くことで、明治期における仏教音楽史の一端を明らかにすることを目的とする。

(傍聴記:近藤静乃)

明治の神仏分離政策を背景として生まれた「仏教音楽」による教化活動について、先行研究ではおもに唱歌作品の分析が中心であったが、発表者は人物や組織、とりわけ来馬琢道をめぐる明治後期以降の動向に着目する。同講習所開設以前の仏教唱歌会や仏教音楽会はいずれも浄土宗を拠点としており、質疑では曹洞宗僧侶としての来馬の活動に関心が集まった。浄土系各宗に比べて、曹洞宗の法儀では教義上あまり「音楽」を前面に出さないなかで、来馬の目指した「仏教音楽」活動を同宗ではどのように捉えていたのか。「法式改良論」を呈し、宗派の重鎮でもあった来馬の影響力は看過できず、また同講習所が当時浅草地区唯一の洋楽教授所として、宗派や教化活動を越えた音楽教育の場と意識されていたのか否かなど、様々な議論に及んだ。山内氏のご所属先にて来馬の未整理資料調査に着手したとの由、今後の進展が大いに期待される。蛇足ながら、画面共有の際に文字が小さく不鮮明な箇所が散見されたので、スライドの表示には今少し配慮が必要に思われた。

◆東日本支部 第143回定例研究会

日時: 2025年2月1日(土) 14:00~15:00

開催方式: Zoomによるオンライン開催

司会: 金 志善(東京大学)

<研究発表>

1. 「アニメ音楽」における「ジャンル」の問題

—アニメBGMにおける和楽器奏者と作曲家のネットワークとコラボレーションの可能性—

グロスバック・ギャレット

(Wesleyan 大学大学院音楽科博士後期課程)

(発表要旨)

近年、日本政府は外交政策の一環として日本のポップカルチャー、その中でも特にアニメのプロモーションを推進しており、アニメの中で重要な役割を担う音楽は「アニメ音楽」として世界中に人気を高め、ストリーミング配信でも大きな存在感を示している。アニメ音楽の作曲を担当している作曲家と各国のオーケストラのコラボレーションも増えつつある。しかしながら現時点で「アニメ音楽」に関する研究は少なく、学術論文や文献は数件に限る。K-Pop の人気に刺激を受けて、近年アメリカの大学は韓国のポピュラー音楽に関する研究を促しているものの、米国の Japan Studies の中で音楽に関する研究や授業、また大学のポジションは数少ない。その理由を探ると、K-Pop とは対照的に「アニメ音楽」という「ジャンル」を定義する難しさが浮き彫りになった。その要因として、英語圏でよくみられる“anime music”というキーワードは日本語に翻訳しづらく、具体的には「アニメ劇伴」、「ゲーム音楽」、「アニソン」、「ボカロ曲」、「J-Pop」等の用語との境界が曖昧なことが挙げられる。

「ジャンル」は、情報化社会において楽曲推薦アルゴリズムやマーケティングに重要な概念として定着し、純粋に楽曲そのものが持つ特徴を分類することとどまらず、人口動

態やアイデンティティー等、社会集団の活動とも深く結びつき、商業の分野だけでなく政策にも関連すると考えられる。本研究では、アニメ音楽の作曲家へのインタビューを通して、従来のポピュラー音楽分野全般で重要視されているジャンルの常識によって生じた誤解を探り、「アニメ音楽」における「ジャンル」の問題を再考する。「和楽器」と「ジャンル」の関係は特に複雑であり、「時代物」や「日本を背景としたもの」のみに限らず、作曲家と奏者の直接的な関係がアニメ音楽へ和楽器を用いるきっかけとして重要であることがみえてくる。

(傍聴記:前原恵美)

本発表の基底には、発表者が和楽器を用いた作曲を学んだ経験と、ストリーミングプラットフォームによる日本の Anime music の定義への疑念があった。この Anime music (アニメ BGM や主題歌等、アニメで使われる音楽全体)の定義の曖昧さは確かにあるが、フロアから指摘があったように、ストリーミングプラットフォームでの定義と学術研究における定義は分けて考えるべきであろう。今後、Anime music が学術的に定義され、その中で多様な様式(J-POP やロック、和楽器演奏、クラシック等)の整理が進むことを望みたい。フロアからは、「クエア」(本発表では「侵害」)を失敗ではなく、越境やクロスオーバーなどポジティブに捉える考え方もあるとのコメントがあり、「クエア」の多面的な捉え方に可能性を残した。学術的に定義された Anime music が「クエア」の視点から見直されれば、Anime music と和楽器(を使った音楽)を通して、作曲家という職業や役割、作曲を学ぶということ、生演奏(演奏家)の意義等を問い直すことにも繋がり、その波及性が期待される発表であった。

■会員の声■

○書寫山圓教寺における「如意輪講式」復元法要

日時: 2025 年 4 月 6 日(日)10 時開始~15 時終了予定

場所: 圓教寺(天台宗、姫路市)

詳細は、圓教寺 HP(<http://www.shosha.or.jp/>)を参照。

唱導で有名な澄憲(1126~1203)の如意輪観音を讃歎する七段の講式を、昨年に引き続き、法要として復元勤修

します。本講式の内容と復元については、2024 年 11 月

の当学会大会にて共同発表しています。(柴佳世乃)

■会員の声 投稿募集■

1. 次号締切: 2025 年 5 月 20 日(6 月下旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数・書式: 25 字×8 行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学

会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

※原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただくことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

■定例研究会発表募集（7月例会）

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。

発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記したファイルを添付の上、4月30日までに東日本支部事務局にメールにてお申込みください(tog.higashi@gmail.com)。発表希望を提出後、1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが再度ご連絡ください。

■東日本支部委員会からのお知らせ■

『東日本支部だより』は、第63号(2023年11月号)より、印刷・郵送を停止し、学会ウェブサイトから配信しています。最新号は、学会メーリングリスト(ML)で告知するとともに、そのURLを送信します。学会MLに参加していない方はQRコードから登録フォーム(<https://qr.paps.jp/19Xb>)にアクセスし、メールアドレスを登録してください。

また、『東日本支部だより』の郵送を希望される場合は、支部事務局(tog.higashi@gmail.com)へ直接ご連絡ください。上記のML登録フォームで「郵送を続ける」にチェックを入れた場合も、必ず支部事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。



■編集後記■

今月号支部だよりでは、12月例会と2月例会の報告をお届けします。原稿をご執筆いただきました皆様に心より御礼を申し上げます。

東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からのお申し込みをお待ちしております。本誌での「会員の声」にも情報をお寄せいただき、積極的にご活用ください。次号の発行は6月下旬を予定しております(TM)。

発行:一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部
編集:マツ・ギラン、金光真理子、清水(松浦)春菜、森田都紀
〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2 国際基督教大学
教養学部 ギラン研究室気付

E-mail: tog.higashi@gmail.com
